

学校教育目標		人間性豊かな自立に向かう児童の育成～学びの自立・心の自立・生活の自立～		研究主題	学びの自立を求めて ～自ら考え、表現できる児童の育成～ 主体的・対話的で深い学びを実現する実践研究を踏まえ、生徒指導の３機能を加味した授業づくりと児童の自治力の向上を目指す。	
項目	自 己 評 価			学校関係者評価		
	短期目標達成状況（○：成果 ▲：課題）	主たる取組内容	今後の改善方策	評価	評価書	評価
知	1 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善 ①学校評価教員アンケート：分かりやすい授業に努めている 純肯定86.7%○ ②全国学調：全国平均 →国－5.2▲ 算－2.5▲ 県版学調：結果未発表のため自校採点・昨年比 4年→4国▲66.6（昨年70.1） 4算○72.4（66.5） 5年→5国○71.5（68.7） 5算○63.7（59.1） 5理○62.8（53.7） 安芸市版学力調査：全国平均以上 1国○ 1算○ 2国▲ 2算▲ 3国○ 3算▲ 4国▲ 4算▲ 4理▲ 5国○ 5算○ 5理○ 6国▲ 6算▲ 6理▲ ③ICTの活用：活用範囲の拡大 学級活動関連項目：肯定的回答80%○ ④全国学調児童質問紙学級活動関連項目：肯定的回答85%▲（全国比では＋9） ○授業研究を全校研3回・ブロック研を全員実施することできた。事後研を通して、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善について考えることができた。 ○授業や家庭学習の中でICTの活用が広がってきた。 ▲授業力チェックシートは目標平均3.0以上にに対し3.2であったが、結果を確実にフィードバックし、共通課題に取り組み、更なる授業改善が必要である。	1 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善 ①授業実践の検証（授業力チェックシートの活用） ・シートを活用し、自己評価及び他者評価を行った。 ・授業研以外にも授業を見合うことを推奨し、指導力の向上に取り組んだ。 ②各教科、各単元で身に付ける力の確認、ゴールから設計する授業構成 ・全校研3回（算数科2回、学級活動1回）講師招聘により、客観的な検証とした。 ③各教科の見方・考え方を働かせ、他教科に汎用する力の育成 ・ブロック研は研究教科以外の教科を実施した。 ④授業や家庭学習の中でのICTの積極的活用 ⑤児童の自治力向上に繋がる学級活動の充実（学級活動の意義理解、話し合い活動の仕掛け、児童の振り返り） ・年度当初から計画的に学級活動の研修を実施した。全校統一テーマでの学級活動の実施（学級目標の決定、係活動、運動会・学習発表会、○○年生に向けて）、キャリアシートの活用	・学習指導要領に基づいた教材研究と教材分析力を高める研究を継続する。 ・単元で身に付ける力を明確にしたうえで、ゴールから設計する授業を構成する。 ・授業力チェックシートの中から共通課題を見出し、全校での授業改善を図る。 ・授業研と授業研を繋ぎ、連続性のある校内研修とするために、授業レポート等の担当を決め、確実に研究経過を蓄積する。 ・特別活動を充実させ、児童の自己指導能力を育成し、自己有用感と自尊感情の向上をねらう。	C	・読解力、表現力にもつながり、算数の文章題など他教科の理解にもつながる「国語の力」をもっとつけてほしい。 ・学年によって学力調査の結果に差がある。 先生によって授業力向上に差が生じないよう学校として取り組んでほしい。	C
	2 家庭学習の充実 ①宿題提出率：1学期80％→2学期87％▲（目標90％） ②学習時間が守れた:80%→60% ▲ ③自主学習・読書:80%→77.5% ▲ ④全国学力学習状況調査児童質問紙「計画性」80%→51.6%▲ ○家庭学習については、多くの児童が毎日提出できている。目標の達成には及ばなかったが、1回目の調査結果より、増加してきた。 ○自主学習については、各学年に応じた視点を与え、校内に掲示し互いに見合うなど、学習内容をより良いものにしようと意識できるようになった。 ▲家庭学習をしない児童が固定化しており、家庭の協力が得られないケースにおいては、放課後担任と学校で宿題をしていくなどの対応をしている。 ▲学習時間の確保においては、自主学習の内容の充実が課題となっている。めあてや振り返りを書くなど目的をもって取り組める、よりよい自主学習を目指す必要がある。	2 家庭学習の充実 ①授業に生かす予習を設定 ・本読み等できることから始めたが、内容の濃い予習にまでは至っていない。 ②家庭学習強化週間の設定（1学期、2学期） ・予定通りに実施した。 ③小中連携による家庭学習時間に関するアンケート実施（年間3回実施・分析） ・安芸中学校区連絡会にて、共通取組についての確認を行い、実践し、振り返りを行った。中学校の実態を踏まえ、小学校段階での指導の見直しをする必要がある。 ④自主学習ノートの評価活動 ・自主学習の振り返りの観点や基準を明確にし、3～6年の取組の統一を図った。 ・中学校区での自主学習ノート交流	・予習の仕方やその内容についての指導の充実を図る。 ・小中連携による家庭学習時間に関するアンケートを継続して実施する。 ・自主学習の内容を再検討し、質を高める。（評価方法を工夫することにより、学習意欲を向上させる。自主学習メニュー表の導入） ・自主学習のめあての設定と振り返りを徹底する。 ・個に応じた家庭学習の内容や量を工夫する。	C	・親子読書の充実を図ってほしい。 ・図書の活用を進める取組の強化が必要ではないか。 ・タブレットの積極的な活用を。	C
徳	1 豊かな心の育成（道徳教育・人権教育） ①学校生活アンケート：学校生活が楽しい肯定90％以上→89.3%▲ ②道徳意識調査：自分に良い所がある肯定70％以上→72.8%○ ○「学校が楽しい」の設問では目標値には及ばなかったが、肯定的回答は伸びている。児童に目的をもたせ、達成感が得られる活動を仕組んできた成果と考える。 ○道徳科の授業研を全ブロックで計画通りに実施し、授業公開も全学級で行うことができた。 ▲自他を認め合う場面を設定し、児童が達成感を味わうことができる工夫が必要である。 ▲道徳の授業等で「高知の道徳」を活用できているが、家庭での活用が十分でないため、更なる周知が必要である。	1 豊かな心の育成（道徳教育・人権教育） ①道徳科の授業研実施 ・ブロック研、年次研として実施し、振り返りを行った。 ②道徳科授業公開 ・統一参観日に授業公開をした。 ③教師による肯定的な声かけによる自己有用感の高揚 ・児童の善行について、タイムリーに肯定的な評価を実施した。（児童集会等） ④道徳科と関連した学級活動（2）（3）の授業改善（自己決定し、自己実現を図る） ・特別活動の充実を図ることにより、自己肯定感や自己有用感の高揚をねらった。自分たちで考えて動くことの大切さや楽しさを感じ取ることができつつある。 ⑤高知の道徳等の利活用 ・学校だよりを用いて児童・保護者への啓発を行った。	・各ブロックで道徳の授業研究を実施する。 ・安芸市統一参観日で全学年、道徳の公開授業を行う。 ・学校活動全般や道徳、学級活動等を通して、自他を認め合う場面を意識して設定する。 ・道徳の学習評価についての教員研修の充実を図る。 ・「高知の道徳」の活用を進める。 ・行事等で達成感が得られる活動を意図的に仕組む。 ・授業や行事などを特活や道徳科とからめて取り組み、自己有用感や自尊感情を高めていく。	B	・児童とのコミュニケーションを大切にしてい て、できる喜びを持たせるように。 ・ほめられることで、さらに意欲を持つことが できると思う。	B
	2 生徒指導・特別支援教育の充実 ①Q-Uアンケート：学校生活満足群全校平均70％以上→60.5%▲ （1回目より＋12.4%） ②合理的配慮を考える視点をもった教員の育成：全教員が合理的配慮の必然性や具体的な手立てができるようになる。→高知大学 是永先生6回、関西国際大学 中尾先生1回 全体研修と個別の助言を受けることで、具体的な手立てを学ぶことができた。 ○いいこと見つけの木等を通じて自己有用感や自尊感情が高まりつつある。 ○行事や委員会等で目標を設定し、児童主体で活動できる場面を工夫することができた。 ○特別支援教育に関する研修を計画的に行うことができた。 ○支援ミーティング・校内支援会は計画的、かつ必要に応じて実施できた。 60回（予定を含む） ○Q-Uアンケート：目標値には達さなかったが、1回目より12.4%上昇した。それぞ れの児童に声かけをしたり、児童同士の認め合いや自尊感情を高めたりするための取組を 行うことができた。 ▲特別支援教育の視点を重視した学級経営、授業展開については、更なる改善が必要。今 後も研修等により教員の認識を高め、支援にあたる必要がある。 ▲個別の対応が必要な児童が複数おり、人員の確保が大きな課題。	2 生徒指導・特別支援教育の充実 ①Q-Uアンケート ・結果に基づき、学級支援シートを活用した自己有用感や自己肯定感を育むた めの取り組みを研究職員会で全体共有し、手立てを実施した。 ②生徒指導の3機能に基づいた授業実践 ・生徒指導担当を中心とした校内研修を実施した。 ・年間3回生徒指導の3機能を生かした授業づくりアンケートを実施し、検証を 図った。 ③特別支援教育に関する研修実施 ・是永先生→年度当初の1年生の見取りから、夏の校内研修、3学期の年度末 検証まで計6回 ・中尾先生→全校児童の見取りと支援伝達 ・外部専門家を招聘しての研修4回（サポート事業・巡回相談） ④特別活動の充実（学校行事、委員会活動、縦割り班活動等） ⑤校内支援会の改善と充実（SC・SSWの活用）	・生徒指導の３機能を生かした授業づくりの研修を継続する。 ・Q-Uアンケートの分析結果を学級経営に位置付け、児童に とって居心地のよい学級集団を作る。 ・児童同士の認め合いや自尊感情を高めるための取組を継続す る。 ・児童が活躍できる場を意図的に設定し、児童主体の行事の計画 を行い、実施する。 ・特別支援教育に関する講師招聘研修を行う。 ・校内支援会は、個別の課題を明確にしたうえで、意図的・効果 的に実施する。	B	・個別の対応の必要性や内容を他の先生と もしっかり共有してほしい。 ・先生同士の学び合いを大切にしてほしい。 プラスの連鎖を起こすように。	B

体	1 体力の向上 ①全国体力・運動能力調査全8項目：男子4項目、女子5項目全国平均以上 男子3項目▲（握力・シャトルラン・50M走・立ち幅跳び・ソフトボール投げ） 女子7項目○（50M走） ○体育朝礼で全校でリズムジャンプに取り組み、体育の授業改善（セット運動の導入）も行ってきた結果、女子の結果が大きく伸びた。男子は5項目が全国以下だが、8種目の合計点では全国を上回っている。 ○体育アンケートにおいて「体育の授業が楽しい」の肯定的回答が92.6%であった。 ▲男女ともに共通して50M走に課題がある。	1 体力の向上 ①体育科の授業改善 ・ブロック研において体育科の授業提案を行い、授業の在り方について協議した。 ・県保健体育課の学校訪問→授業参観での助言・教員研修の実施 ②日常生活の中での運動量の確保（外遊びの奨励、体育朝礼の実施） ・体育朝礼を実施した。 ・20分休みや昼休みには外に得て体を動かすことを促した。	・全学年でセット運動（2週走る・体操・リズムジャンプの順）を行ってから授業を行う。 ・全学年で朝の会にジャックナイフストレッチを継続して行う。 ・全学年が「私たちの体育」を購入し、学校全体が統一された体育授業を行えるように取り組む。→「走」の分野への働きかけ	B	・参観した授業で、音楽に合わせて体操に楽しく取り組んでいた。工夫されている。 ・シャトルランなどの運動において、持久力・忍耐力などが身に付くと他の場面にも好影響が出るので頑張ってほしい。	B
	2 生活リズムの確立 ①朝食摂取率97%以上 →97%○ ②就寝時刻遵守60%以上 →59.8%▲ ③ノーメディア達成率55% →63%○ ○児童の朝食摂取への意識や保護者の協力により摂取率が向上した。 ○ネット休みの日の取組が少しずつ定着し、達成率が向上してきた。 ▲学年が上がるにつれて、スマホを使用する児童が増えていることが、就寝時刻の遅さにもつながっている。家庭でのルール作りやネットトラブルに関する学習を継続して行う必要がある。	2 生活リズムの確立 ①養護教諭・栄養教諭による保健指導、食に関する指導実施 ・給食時に栄養教諭による指導を実施し、食生活の大切さについて学習した。 ②各種通信による保護者等への啓発 ・定期的な保健便りの発行を行った。 ③メディアに関する意識改革を行うための取組 ・あき元気っ子カードの取組期間中に「ネット休みの日」を設定し、全校で取り組んだ。	・あき元気っ子カードを継続して行う。取り組み期間中、火曜日はノーメディアの日とし、自分で決めたレベルに応じて取り組む。（目標を一律にせず、個に応じたものとする） ・運動量を確保する取組や生活習慣に関する指導を行う。 ・保護者の協力を得るために、学校だよりや学級だよりを用いて情報提供する。 ・あき元気っ子カードやノーメディアカード、生活リズムチェックカードをファイルで管理する。	B	・保護者の理解も得ながら進めていってほしい。 ・ネットの影響も含めて、上手に使う指導を行ってほしい。 ・取組が上手にできなかった児童に対しての対策・対応が大事だと思う。	B
横断	1 不登校への総合的な対応 ①新規不登校児童を生み出さない→1名 ②不登校児童2%以下 →2% ○教育研究所、家庭児童相談質等関連機関との定例学校訪問（月1回）→当初計画通りに実施できた。 ○新規不登校児童については、定期的に連絡を取り、継続した支援を行ってきた。1月から別室登校ができるようになっていた。 ▲困り感のある児童に寄り添い支援を行ったが、特性もあり支援がうまく結びついていないケースがある。特別支援教育の研修の充実と児童理解の具体策の共有を今後も継続し児童理解に努める必要がある。 ▲別室登校の際の、対応する人員の確保が大きな課題。（児童支援の教員が配置されていない）	1 不登校への総合的な対応 ①校内支援会、支援ミーティングの実施 ・各関係機関と連携し、支援ミーティングを実施した。児童と保護者の困り感や各種ニーズにタイムリーに対応できるように努めた。具体的な方策について協議し、取り組むことが明確になることを意識して実施した。 ②児童の特性を踏まえた学級経営 ・課題が多様化し、対応が困難な状況があるが、保護者との連携を密にし、児童理解の研修等を重ねる。 ③児童の変容に関する情報共有 ④いじめの早期発見と迅速な対応 ・管理職や級外教職員との校内での気付きを担任に情報提供する等、チームで支援する組織作りを行う。 ⑤校内研修の実施→未然防止、早期対応のための研修2月21日（予定）	・生徒指導の3機能や発達支持的生徒指導を意識した授業改善の継続 ・支援ミーティングや校内支援会を適宜実施し、児童の実態把握と課題解決のための支援体制を見直すことを継続する。 ・教育研究支援センターの定例学校訪問及び家庭児童相談室との連携実施 ・Q－Uアンケート結果を活用し、児童の実態や困り感等をいち早く察知して指導にあたる。 ・「気持ちメーター」等の使用を継続し、効果的に活用する。	C	・取組が悪いわけではないと思う。 ・「見えないいじめ」は対応が難しいが、見えないところにも、目を光らせてほしい。 ・何かに失敗しても乗り越えられるよう、失敗例や復活例をもっと児童にしてあげたらどうか。	B
	2 学校における働き方改革の推進 ①在校時間月45時間以内遵守教員割合70% →49%▲ ○目標値には及ばないが、月を追うごとに45時間以内の割合は増加している。 ○校務支援員の配置があり、教員の事務作業（印刷・アンケート集計等）の軽減ができている。 ▲教材研究・年次研・生徒指導等に時間を要している。個人の意識改革と学校として取り組むべきことの両面から考えていく必要がある。	2 学校における働き方改革の推進 ①各部会での業務スケジュール確認 ・月1回の研推の設定と、部会内の業務の進捗管理を行った。 ②個人面談の実施 ・面談を通して、個人の働き方や業務改善への意識向上を図る。 ③校務支援員の活用 ・校務支援員の配置による校務軽減が図られているかどうか、毎月末にチェックし、市教育委員会に報告している。	・業務スケジュール作成・検証 ・育成型人事評価：年度始め、中間、年度末面談の実施 ・授業時数の見直しによる、学期始め、学期末の短縮授業の実施 ・最終退勤時刻の設定 ・校務支援員の更なる活用	C	・家庭学習にもっとタブレットを活用すれば、先生も確認の時間が短縮されるのではないかと。	C
	3 防災安全教育・安全管理の充実 ①学校安全点検、避難訓練、防災授業、緊急避難名簿作成、防災グッズ管理、危機管理マニュアル作成及び活用：年間計画に沿い100%実施 →100%実施○ ○当初計画通りに実施できた。 ○弾道ミサイルに関する避難訓練の実施を初めて行った。 ▲現在行っている防災学習を、児童の気付きや疑問・要望等を取り入れた内容へと変えていく必要がある。	3 防災安全教育・安全管理の充実 ①学校安全点検・避難訓練：年間5回実施 ・避難訓練実施後アンケート「自分で考えて行動できた」97.6%○ ②防災授業実施 ③緊急避難名簿作成、防災グッズ管理 ④危機管理マニュアル見直し・更新	・実効性のある、色々な場面を想定しての避難訓練を計画、実施（年間5回以上） ・県指定「学校安全総合支援事業」への取組（予定） ↓ 今後、具体的な打ち合わせを行っていく。	B	・校区外、安芸市外の教職員が多いため、もっと地域を知ってほしい。 ・指定事業については、危機管理課や地域の自主防と連携して取り組むとよい。	B
	4 家庭・地域との協働体制の確立 ①参観日、PTA行事、学校行事等への参加率向上 80%以上→全体85%○ ・運動会 →95% ・人権参観日保護者参加率 →83% ・学習発表会 →保護者90%（地域含め257名） ②学校評価アンケート 保護者「お子さんは学校生活に満足している」肯定群85%以上→肯定群86%○ 「保護者地域の意見を聞き、学校運営に生かしている」肯定群85%以上→78%▲ ③地域学校協働本部事業年間30回以上→46回（予定含む） ○学校行事等を元に戻す方向で進めてきたこともあり、保護者の参加が増加した。 ○愛校作業への参加が増え、非常にありがたかった。 ○見守り活動など、児童民生委員の方々の協力を得られ、連携が深まった。 ▲保護者・地域の声を聞き、学校運営に生かす手立てを講じなければならない。	4 家庭・地域・学校の協働体制の確立 ①各種通信の発行による情報提供 ・月1回の学校便りを発行、その他適宜必要に応じて文書で家庭連絡を行った。 ②メール配信システム「すぐる」を活用した情報提供 ・急を要する内容や不審者情報、その他必要に応じて情報を配信した。 ③学校評価に係るアンケート実施（「すぐる」を活用） ・今年度から「すぐる」によるアンケートを実施。本年度は62%の回答を得た。結果については、3月上旬に報告する予定。 ④学校運営協議会の発足 ・地域コーディネーターを中心とした協働的な取組の実施。	・各種通信の発行による情報提供 ・「すぐる」を活用した情報提供（紙媒体を少なくしていく） ・「すぐる」を活用した学校評価に係るアンケート実施（回答率を向上させていく） ・保護者が参観しやすい日程や内容の工夫 ・学校運営協議会、地域学校協働本部に関わる取組の充実を図る。	B	・学習発表会の内容がよかった。（音楽や劇など工夫されていた） ・「人権」参観日という名称がかたいので、別の表現にするのはどうか。 ・学校から協力を求めるだけでなく、地域への行事にも参加・協力してもらいたい。	B
	5 保小中の円滑な連携・接続の推進 ①保小連絡会：年間2回実施 →1回目5/26 2回目2/22（予定） ○ ②教員の夏季休業中の保育研修実施 →8/4 ○ ③4校連絡会：1回目5/19 2回目8/23 3回目1/17 ○ ○保小連絡会では、児童の状況把握や情報交換を行うことができた。 ○夏の保育研修では、参観だけでなく、保育所生活の中での育ちや学びについて共有し、相互の意見交換ができた。 ▲4校連絡会では、実践交流等有意義な面が多かったが、次年度からは1中8小の連携について連携教育研究会で具体的な取組を考えていかなければならない。	5 保小の円滑な連携・接続の推進 ①保小連絡会：年度始め新1年児童の学校生活に関する情報共有、年度末次年度入学予定児童の情報共有 ②教員の夏季休業中の保育研修：2グループに分かれおひさま保育所・矢ノ丸保育園を訪問、研修 ③安芸中校区4校の教職員で研修：共通の取組や実践交流	・保小連絡会：年度始め新1年児童の学校生活に関する情報共有、年度末次年度入学予定児童の情報共有を継続する。 ・教員の夏季休業中の保育研修：円滑な保小接続のための教員レベルの交流を継続する。 ・可能な範囲で相互の行事へ参加する。 ・教職員間だけでなく、児童同士の交流を図っていく。	B	・1中8小の連携した取組に期待している。	B